

児童の学習を深める教材研究

児童の見方・考え方を育てる教材とは

Teaching materials research deepening children's learning

What is teaching material for nurturing children's viewpoint and way of thinking

山田 均

Hitoshi YAMADA

要旨 (Abstract)

授業を行うにあたって、児童・生徒が学習に興味や関心を持ち、意欲的に学習に取り組み、目標を達成するうえで、教材はとても重要である。それゆえ、教師は学習を構想する際、学習内容、児童の実態を踏まえて教材研究を行い、教材の解釈を行ったり、教材と児童・生徒との出会わせ方を含め、学習の計画を立てたりと教材研究に取り組んでる。

教材研究については教材を「ネタ」と呼び、児童の追究を重視した有田和正の実践が高い評価を受けている。有田は「材料七分に腕三分」という言い方を用いて、児童の主体的な学習を成立させるうえで教材がいかに重要であるかを提案し、その考えの下実践を積み重ねていった。

そこで、有田の提唱した「ネタ」開発の考え方をもとに、児童が主体的に学習に取り組み、その考えを深める教材の在り方を考察することとした。今回、より実証的に検証を進めるため、筆者が教材研究を行い、指導計画を立て、王寺町立王寺南小学校の6年生の学級で「新しい日本への歩み」の単元の学習指導を行い、児童の発言やワークシートの記述から教材の重要性について検証を行った。

キーワード：(教材) (ネタ) (社会的な見方・考え方を働かせる) (教材研究)

I. はじめに

教材について考えていくときに、教材が意味するところ、すなわち、教材についての概念について整理を行う必要がある。行政用語としての教材は、文部科学省が学習指導要領に示された学習目標を達成するために必要な教育環境を整えるという趣旨で策定されている「教材整備指針」に教材という語は登場している。この「教材整備指針」は、学校で整備すべき教材の品目と数量が示されているものである。例えば、小学校社会科では、「地図黒板・白地図(世界、日本、地方別、都道府県別・市区町村別、校区など)」や「教授用掛図(地域、産業、歴史、歴史年表、環境、防災、情報化、文化遺産(国宝・重要文化財、世界文化遺産)、世界の国旗など)」が示されている。これらからも明らかなように、行政用語において、教材と教具等との区別はなされていない。

しかし、教具は指導する際に必要な道具という意味合いが強い。それに対して、教材は学習目標を実現させるための材料であり、児童・生徒に理解させたい知識や概念、習得させたい技能など、児童・生徒に身に付けさせるた

めの具体的な材料という意味で使われていることが多い。このように、学校現場においては、教材と教具は明確とは言えないまでも違うものとして捉えられている。

さらに、1960年代に各教科で行われた教育内容の研究によって、教材と教育内容を区別するという考え方が出てきた。その考え方に基くと、教材とは教育内容としての概念や法則が具体化された事実や事象、素材ということになる。例えば、小学校社会科の5年生の内容（4）の我が国の産業と情報の関わりについての学習において、放送あるいは新聞などの産業を取り上げて、放送や新聞は多種多様な情報を収集・選択・加工して提供していることなどについて学習を行う。ここでは、放送社や新聞社、そこで働く人々が情報を集め発信するまでの工夫や努力に着目して、聞き取り調査をしたり映像や新聞などの資料を調べたりして、放送や新聞などの産業の様子を捉え、これらの産業が国民生活に果たす役割を考え、国民生活に大きな影響を及ぼしていることを理解することを目標としている。この目標を達成するために学習対象とする放送や新聞などの産業が教材となるのである。

このように、学習指導を行う上で、教材は指導する教師と学習する児童・生徒を結ぶ役割を果たすとともに、現実の社会、言い換えれば日常の生活と学問の世界とを結ぶ役割をもつものである。だからこそ、教材研究は重要なものであり、学習者である児童・生徒の実態を踏まえた教材研究が求められるのである。

Ⅱ. 社会的な見方・考え方について

『社会的な見方・考え方』については、『小学校学習指導要領解説社会編』で次のように説明されている。『社会的な見方・考え方』は、小学校社会科、中学校社会科において、社会的事象の意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の『視点や方法（考え方）』であると考えられる。そして、『社会的な見方・考え方を働かせ』るとは、そうした『視点や方法（考え方）』を用いて課題を追究したり解決したりする学び方を表すとともに、これを用いることにより児童生徒の『社会的な見方・考え方』が鍛えられていくことを併せて表現している。こうした『社会的な見方・考え方を働かせ』ることは、社会科、地理歴史科、公民科としての本質的な学びを促し、深い学びを実現するための思考力、判断力の育成はもとより、生きて働く知識の習得に不可欠であること、主体的に学習に取り組む態度にも作用することなどを踏まえると、資質・能力全体に関わるものであると考えられるため、柱書に位置付けられている。また、『社会的な見方・考え方』は、次ページの図のように、小学校社会科、中学校社会科の各分野の特質に応じた見方・考え方の総称であり、小学校社会科においては、『社会的事象の見方・考え方』を働かせ、学ぶことを重視する必要がある。『社会的事象の見方・考え方』は、『位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して（視点）、社会的事象を捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること（方法）』と考えられ、これらは、中学校社会科の各分野の学習に発展するものである。『社会的事象の見方・考え方を働かせ』るとは、これらの視点や方法を用いて、社会的事象について調べ、考えたり、選択・判断したりする学び方を示している。例えば、どのような場所にあるか、どのように広がっているかなどと、分布、地域、範囲（位置や空間的な広がり）などを問う視点から、また、なぜ始まったのか、どのように変わってきたのかなどと、起源、変化、継承（時期や時間の経過）などを問う視点から、あるいは、どのようなつながりがあるか、なぜこのような協力が必要かなどと、工夫、関わり、協力（事象や人々の相互関係）などを問う視点から、それぞれ問いを設定して、社会的事象について調べて、その様子や現状などを捉えることである。また、どのような違いや共通点があるかなどと、比較・分類したり総合したり、どのような役割を果たしているかなどと、地域の人々や国民の生活と関連付けたりする方法で、考えたり選択・判断したりすることなどである。したがって、教師が教材や資料を準備する際には、

こうした視点や方法に基づいて、問いを意識することが大切である。なお、問いとは、調べたり考えたりする事項を示唆し学習の方向を導くものであり、単元などの学習の問題（以下、解説において『学習問題』という。）はもとより、児童の疑問や教師の発問などを幅広く含むものであると考えられる。¹⁾と、示されている。

つまり、「社会的な見方・考え方を働かせる」とは「空間的な視点」「時間的な視点」「関係的な視点」で社会的事象を捉え、「比較・分類する思考」「総合する思考」「関連付ける思考」を組み合わせながら、児童が社会的事象の特色や意味の理解に迫っていくように学習を進めるということである。この学習によって、「概念的知識」を獲得することができるようになるのである。そして、このように「社会的な見方・考え方を働かせる」学習が「主体的で対話的で深い学び」なのである。

Ⅲ. 有田和正の「ネタ」について

有田和正は「ネタ」という用語で教材を捉え、画期的な社会科授業を実践してきた。有田が講演でよく口にしてきた「教材開発」「授業のネタ」「はてな？」などの言葉は、社会科教師のみならず、広く教育界に広がっていた。有田は、教材を「ネタ」と呼び、学習内容と児童の間に位置づくものと定義した。そして、「ネタ」と児童のはたらきかけとの関わりを重視して、「ネタ」すなわち教材を開発することの必要性を説いている。これは学習内容から教材を引き出し、教材の中に子どもとの関わりを組み込みながら、学習内容に迫っていくという考えが基になっている。児童は「ネタ」との出会いによって、知的好奇心が喚起され、その「ネタ」を追究したくてたまらなくなり、調べたり、考えたりという学習に取り組んでいる。その児童の姿は、学習を楽しんでいるようにも、切実な問題を解決することに必死なようにも見える。有田の「ネタ」による教授・学習の方法や社会科としての教科内容などについての評価は一律ではない。批判的なものもある。しかし、「ネタ」との出会いによって、児童が主体的に学習に挑み、学級の友達や教師はもとより、地域や様々な関係者の方々と対話し、自らの考えをより確かなものとしようと考え、考え合い、学びを深めていたことは事実である。

有田は「ネタ」を開発する上でのポイントについて、著書の中で次のように述べている。「授業のネタをつくるには、いくつか考えておくとよいことがある。それをあげてみよう。◇『子どもの常識（固定観念）をくつがえすもの』を考える ◇『わかっている』と思っているのに、実は『わかっていない』というものを考える ◇子どもの意表をつくものを考える ◇子どもの目を開くものを考える ◇事実を見直さざるを得なくなるものを考える ◇新鮮な出会いをさせるものを考える ◇大事なところをわざとぬいた資料をつくる ◇子どもが体当たりして追究できるもの考える ◇子どもの生活や生き方と深く結びついているもの考える」²⁾

有田は、児童に社会科の力を付けさせるためには、面白い社会科授業をつくる必要があると考えている。そのために必要なものが「ネタ」なのである。授業が面白いと思えば、児童は身を乗り出してくる。有田は「材料七分に腕三分」ということを言っている。これは「ネタ」の重要性について語っているもので、先述したような要素をもつ「ネタ」を提示することができれば、児童の知的好奇心が喚起され、主体的な学習が成立するが、教材が悪ければ、児童の学習意欲は高まらないということである。

このような「ネタ」を開発するために有田が取り組んだことはその著書「名人の道 社会科教師」に記されている。その中で、有田は「授業はねらいのよしあしではなく、ネタのよしあしで決まる。」と考えていた。そのため、「授業を計画するとき、教師は目標→内容→方法」という順序で考える。-中略-というパターンが圧倒的に多い。この思考パターンをくずすことだ。立派な目標を考える前に、どんなネタで勝負するのか考えることにしよう。そして、おもしろいネタを見つけよう。ネタが見つかったら、目標をもっともらしく考えればよい。いや、考えなくて

も、ネタがきまれば目標もきまる。たとえば、『一寸法師』をネタにしようときめる。すると『一寸法師で戦国時代の下克上をつかませる』という目標が、自然にきまってくる。『一寸法師のモデルは誰か』と発問することによって、『信長、秀吉、家康など戦国武将を引き出す』という目標も出てくる。これでネタとねらいがきまった。授業の形態は、当然『じっくり考え合う』ということになる。なぜなら、かなり抵抗のある内容だからである。資料は、一寸法師のあらすじの典型場面をあらわした絵四枚が必要だろう。絵本もあった方がよい。一寸法師のレコードも準備しよう。ここまでくると、展開順まできまる。まず、一寸法師のレコードをきかせる。子どもは笑いながらも、いつの間にか歌い出す。歌詞があらすじになっていることに気づく。そこに四枚の絵を提示―。』³⁾

このように有田の授業づくりは「ネタ」が中心にある。有田の考えるよい教師とは、よい「ネタ」を見つけ出せる教師なのである。

IV. 児童の学習を深める教材としての『1964東京オリンピック』の検討

有田の提唱する「ネタ」は児童が主体的に学習に参加し、学習問題を自らの問題と捉え、その解決に向けて追究を深めることになると考える。そこで、有田が提唱している「◇『子どもの常識(固定観念)をくつがえすもの』を考える ◇『わかっている』と思っているのに、実は『わかっていない』というものを考える ◇子どもの意表をつくものを考える ◇子どもの目を開くものを考える ◇事実を見直さざるを得なくなるものを考える ◇新鮮な出会いをさせるものを考える ◇大事なところをわざとぬいた資料をつくる ◇子どもが体当たりして追究できるもの考える ◇子どもの生活や生き方と深く結びついているもの考える」²⁾ ということを踏まえた教材研究により開発した教材は、児童の学習意欲を高め、主体的な学習を成立させ、学習を深めることに効果があることを実証的に明らかにするため、実際に小学校で授業を実践し、検証を図ることとした。なお、本時の流れについては、JEES(全国初等教育研究会)第11回教育セミナーで行われた東北学院大学 佐藤正寿教授の模擬授業を参考している。

取り上げることにした教材は「1964年に開催された東京オリンピック」である。対象学年は6年生、歴史学習の最終単元「新しい日本へのあゆみ」の授業を行うこととした。この単元は、戦後、我が国が平和で民主的な国家として出発し、国民生活が向上し、国際社会の中で重要な役割を果たしてきたことを理解することを主な内容としている。そして、この内容の理解を図るために、日本国憲法の制定やオリンピック・パラリンピックの開催などを手がかりとして学習することとしている。

6年生の児童にとって、過去のオリンピックにはなかった史上初の試みである全国の小学生による東京2020大会マスコットの選定投票に参加したり、連日マスコミ等で有力選手が取り上げられたり、コマーシャル等でもオリンピック・パラリンピックが登場したりと、2020年に開催される「2020東京オリンピック・パラリンピック」は身近な存在である。

1964年当時の日本は、今と違って戦争の影響もあり貧しさから抜け出そうと、国民が一丸となって取り組んでいた時期であった。しかし、このオリンピックの開催をきっかけとして、日本は急激に成長し、現在に至った。特に日本の経済成長に大きな影響を及ぼした歴史のターニングポイントであった。

例えば、オリンピックに合わせて建設・開業した施設として、次のようなものが挙げられる。

- ・競技施設では、国立競技場、日本武道館、駒沢オリンピック公園、岸記念体育館 など
- ・公共交通機関等では、東海道新幹線、東京モノレール、首都高速、名神高速道路の整備、環七通り など
- ・宿泊施設では、ホテルニューオータニ、ホテルオークラ、東京ヒルトンホテル、東京プリンスホテル、コープオ

リンピアなど

このように、オリンピック開催に向けて大規模なインフラ整備が行われた。まさに、世界都市東京を形作るものだった。これだけの建設を行っているため、当然のこととして雇用も増えた。

さらに、オリンピック開催前の日本は高度成長期に入ったとはいえ、敗戦国というイメージが残っており、当時メイドインジャパンと呼ばれた日本製品は必ずしも良質とは言えず、海外での評判もよいものではなかった。しかし、東京オリンピックでセイコーが公式時計として採用され、大会史上初めてトラブル無しで大会を終えることに成功した。こうして日本製品の正確さと信頼性を世界に知らしめることができ、日本製品が世界で認められることになる契機ともなった。

また、『テレビ・オリンピック』とも言われるくらい国民のテレビ購入が増加するなど、個人消費も活性化し、好景気を生み出した。

東京オリンピックは、日本を含めたアジア圏で初めて行われたオリンピックであり、この東京オリンピックの成功は日本にとって戦後の総決算の意味をもち、国際社会での地位や日本人の自信を回復する象徴的なできごとであった。

そして、東京オリンピック開会式の最終聖火ランナーであった坂井義則氏の存在がある。坂井義則氏は、広島に原爆が投下された昭和20年8月6日、広島県三次市で生まれた。中学で陸上競技を始め、早稲田大学では日本陸連の強化指定選手に選ばれた。東京五輪の代表選考会で敗れた後、聖火ランナーに選ばれ国立競技場の聖火台に点火する大役を果たした。国内外のメディアは当時19歳だった坂井氏を「アトミック・ボーイ（原爆の子）」と呼び、戦後復興と平和の象徴とした。

このような「1964年に開催された東京オリンピック」は、オリンピック・パラリンピックの開催が間近に控えているという身近さや、スポーツと平和の祭典がヨーロッパ・アメリカ以外で初めて開催されたという意義、この単元でねらいとしている「戦後、我が国が平和で民主的な国家として出発し、国民生活が向上し、国際社会の中で重要な役割を果たしてきたことを理解する」という内容をしっかりと有していること、そして、児童にとって、前単元の学習や広島への修学旅行を含めて取り組んできた平和学習で学習してきた広島への原爆投下という歴史的事象への理解と結びつく最終聖火ランナーの存在などの要素がある。これらのことを考えれば、有田が提唱している「ネタ」の「『わかっている』と思っているのに、実は『わかっていない』というものを考える」、「子どもの意表をつくものを考える」、「子どもの目を開くものを考える」といった趣旨に合致しているであろう。

また、授業前に行った対象学級の児童に対するレディネス調査の結果、「2020年に東京でオリンピック・パラリンピックを開催することを知っていますか。」の問いでは、全員が知っていると答えている。また、「1964年に東京でオリンピックが開催されたことを知っていますか。」についても、25人中22人がしていると答えている。この調査結果から、当初予想していた通り、2020東京オリンピック・パラリンピックは児童にとって身近な存在であることが明らかになった。そして、1964東京オリンピックについても、予想以上に児童が知っていることが明らかになった。ここで、児童が知っていることと認識していることについて、実は知らないことがあるという出会いは、児童にとって「わかっている」と思っているのに、実は「わかっていない」ものであり、意表をつくものであると考える。

V. 6年生社会科「新しい日本へのあゆみ」における指導の実際

1 学習指導案

(1) 単元名 新しい日本へのあゆみ

(2) 単元の目標

○我が国の復興について、様々な制度の改革や経済の発展、オリンピックの開催などについて家族や高齢者からの聞き取り、地図や写真、統計資料などで調べ、年表などにまとめることなどを通して、我が国は、第二次世界大戦後、民主国家として出発したことや、国民の不断の努力によって、国民生活が向上し、国際交流や国際貢献の面で重要な役割を果たしてきたことを理解できるようにする。

○戦後、我が国が、日本国憲法を制定し、民主的な国家として出発したことや、国民の不断の努力によって国民生活が豊かになり、国際社会においても重要な役割を果たしてきたことについて、今後の日本を支える国民の一人として、また、平和を願う日本人の一人として、今後の日本の役割について自分なりの展望をもてるようにする。

(3) 単元の評価規準

・戦後の我が国の様子や、人々のはたらき、くらしの変化などに関心をもち、国民の不断の努力によって国民生活が豊かになり、国際社会においても重要な役割を果たしてきたことに誇りをもち、社会の進展に一層努力していこうとする態度を養う。(主体的な学習態度)

・戦後の我が国の様子や、人々のはたらき、くらしの変化、戦後の日本経済の発展、オリンピックの開催などについて問題意識をもって追究し、当時の人々が民主国家の国民として、国際社会において重要な役割を果たしてきたことについて考え、考えたことを適切に表現している。(思考力・判断力・表現力)

・戦後の我が国は、民主的な国家として出発し、国際社会において重要な役割を果たしてきたことを理解している。

・戦後の我が国の様子や日本経済の発展、オリンピックの開催などについて、高齢者や父母への聞き取り、写真や地図、年表、統計などの基礎的資料を効果的に活用して具体的に調べ、目的に応じた方法で分かりやすくまとめている。(知識及び技能)

(4) 指導と評価の計画 (全5時間)

次	時	主な学習内容	評価の観点			評価規準
			学	思	知	
一	2	新しい日本への出発			○	・終戦後の人々のくらしについて調べ、厳しい生活が強いられるなか必死に生きていこうとしていた人々の様子を理解している。 ○ ○ ・新しい国づくりのための改革について調べ、日本は平和で民主的な国家をめざしたことをとらえ、日本国憲法が定められたことについて考えている。 ○ ・サンフランシスコ平和条約と日米安全保障条約について調べ、東西冷戦の対立を深めていくなかで、アメリカと日本の関係が強化されていったことについて理解している。
二	2	平和で豊かな国をめざして	○	○	○	・発展した日本の経済について調べ、経済発展の背景には、人々の努力や日本の高い技術力があつたことを理解している。 ○ ○ ・経済の発展に伴い、人々のくらしがどのように変化してきたのか調べ、便利な世の中になってきたこととともに社会保障が充実してきたことについて考えている。 ○ ○ ・東京オリンピックが開催された1964年当時の我が国の状況について地図等の資料を基に考え、オリンピックの開催を通して、

					経済が発展するとともに国際社会の平和と発展に尽力し続けてきた戦後の日本の歩みについて考えている。
三	1	これからの日本とわたしたち	○	○	・戦後発展してきた日本の課題について調べ、これから未来に向けて期待される自分たちの役割について考え、未来に対しての展望をもとうとしている。

(5) 単元について

○教材について

1964年に開催された東京オリンピックは、戦後の我が国に大きなインパクトを与えたできごとである。

日本で最初のオリンピックというだけでなく、アジア地域で初めて開催されたオリンピックでもある。あまり知られてはいないが、初めての東京オリンピックは1940年に開催される予定であったが、当時の日本は戦時中のため開催を返上したという経緯がある。

第2次世界大戦で敗戦国となった日本の戦後の復興は目を見張るほどのものがあり、改めて開催をされたのが1964年の東京オリンピックである。謂わば、戦後復興、平和のシンボルとしての東京オリンピックであると言えよう。オリンピックのメイン会場として国立競技場が建設され、半世紀の間、我が国のスポーツ界の重要な役割を担ってきた。また、東京オリンピックでは日本の選手の活躍も素晴らしかった。日本人が獲得をしたメダル数は、金16、銀5、銅8の計29であり、多くの日本人が日本選手の活躍に心を躍らせていた。

また、東京オリンピックの開会式が10月10日だったということで、1966年から10月10日は体育の日として日本の祝日の一つに制定された。国民の祝日にするくらい、東京オリンピックの開催は意義深いものであったのである。

さらに、東京オリンピックの開催は、我が国の社会や経済、その後の国民生活に大きな影響を与えている。いくつか例を挙げると、

①「オリンピック景気」

大きな経済効果を生み出している。その象徴とも言えるものが、オリンピックを契機として爆発的に売れたカラーテレビである。東京オリンピックをきれいな映像で見るために多くの人がカラーテレビの購入に踏み切ったのである。

②「東海道新幹線」の開通

東京オリンピックの開催に間に合わせるように東海道新幹線は急ピッチで建設され、1964年10月1日、開幕の9日前にギリギリではあるが東京オリンピックに間に合わせて開通した。東海道新幹線は、現在でも日本の大都市圏を結ぶ輸送手段として大活躍し、日本経済にもたらした影響は図り知れないものがある。その後、新幹線の路線は拡大されている。

③「首都高速」に代表される道路交通網の整備

首都高速の計画は東京オリンピック以前よりあり、東京オリンピック前にも一部は供用が開始されていたが、東京オリンピックの開催を契機に開発が加速した。首都高速の開通により、課題となっていた、外国人が訪日する窓口となる羽田とメイン会場となる陸上競技場を結ぶ高速道路の問題は解消できた。しかし、時間が足りなかったため土地の買収を行うことができず、結果的に江戸時代からの由緒ある日本橋の上に高速道路を建設せざるを得ないという問題も生じてしまった。首都高速がもたらした経済効果はとて大きい歴史的景観を

壊すことになってしまった。

④「東京モノレール」の開通

羽田空港から都内へのアクセスの利便性を高めるために造られたのが、東京モノレール羽田空港線である。東京モノレールが開通をしたのが、1964年9月17日。東京オリンピック開幕の直前に運行が始まっている。

⑤「ホテルの建設」

東京オリンピックを見るために多くの観光客が国内外から訪れるため、東京都内で近代的ホテルが林立した。

○児童の実態

以下に述べる児童の実態は平成30年11月30日に王寺南小学校6年2組を対象に行ったレディネス評価の結果である。

i 社会科の学習は好きですか？

はい 24人 いいえ 0人 不明 1人

ii 社会科の学習で好きなものは何ですか？当てはまるものをすべて選びなさい。

- ① 教科書や地図帳、資料集などを調べて勉強すること 11人
- ② 見学をしたり、インタビューをしたりすること 7人
- ③ インターネット使って調べること 20人
- ④ 先生やゲストティーチャーなどの話を聞くこと 4人
- ⑤ 調べたことを新聞などにまとめること 7人
- ⑥ みんなで話し合うこと 7人
- ⑦ デジタル教科書で学習すること 6人

iii 2020年に東京でオリンピック・パラリンピックを開催することを知っていますか。

はい 25人 いいえ 0人

iv 1964年に東京でオリンピックが開催されたことを知っていますか。

はい 22人 いいえ 3人

アンケートの結果、児童は全員「社会科が好き」と答えている。ただ、好きな学習についての問いでは、最も多かったものが「インターネットで調べること」で、次いで「教科書や地図帳、資料集などを調べて勉強すること」であった。この結果から考察できることは、本学級の児童は、個人で学習を進めることを好む傾向が強いということである。おそらく、社会科で学習する内容そのものが好きな児童が多いのであろう。そのため、学級集団で考え合いながら問題を解決したり、多様な表現活動を通して自らの考えを交流し合ったりといった学習活動を好きだと答える児童が少ないという結果になっていると考える。

そこで、本単元の学習を進めるに当たって、ペアで話し合ったり、学級集団に向かって意見を発表したりする場面を意図的に設けて、互いの考えを交流させていきたい。また、その際に答えは一つではないという社会科ならではの見方や考え方を実感させることで、主体的で対話的な学習へとつなげていきたいと考える。

(6) 本時案（第二次 第2時）

①本時の目標

地図等の資料から近代オリンピックが開催された国々から、開催できる理由について考え、東京オリッピ

クが開催された1964年当時の我が国の状況について理解することができる。

② 展 開

学習活動	指導上の留意点	学習評価・資料等
1 今日の学習について知り、見通しをもつ。 2 オリンピックについて知っていることを発表する。	・オリンピックに関係する写真から、オリンピックについて学習することを伝える。 ・オリンピックについて知っていることを発表させ、発言を黒板に整理していく。 ・2020東京オリンピック・4年に1度開催・多くの種目がある・世界中の国が参加する・平和の祭典・世界各国で開かれている等々	オリンピックに関する写真
3 夏季オリンピックを開催するために必要なことについて考える。	・開催国地図で気付いたことを発表させる。 ・開催するために必要なことについて考えさせ、交流させる。	オリンピック開催国に関する資料（掲示用と配付用）
4 東京オリンピック開催のころの日本について教科書等から読み取る。	・東京オリンピックのころ、日本はどのような発展をしていたのか。 ・新幹線 ・高速道路 ・テレビ ・復興が世界から認められた 等々	
5 東京オリンピックについてまとめる。	・日本にとって、東京オリンピックはどのようなオリンピックだったといえるか。 ・復興の象徴 ・平和の証明 ・世界から認められた 等々	
6 聖火ランナーのエピソードについて考える。	・坂井さんが聖火ランナーに選ばれた理由をクイズ形式で考えさせ、改めて東京オリンピックの意義について考えさせる。 ・アナウンサーになったら、どのようなアナウンスをするか原稿を考える。	評価規準 根拠を明らかにして、東京オリンピックについて自分なりの意義を考えている。（発言、ノート）

2 授業の実際

(1) 導入

本時の導入において、1964東京オリンピック開会式の日本選手団の入場場面の写真を提示した。

その写真を見せながら、「今日はこのことについて学習します。」と言うと、児童たちは「オリンピックについてだ。」と口々につぶやいていた。本時までの学習を踏まえて、そう判断したようである。

その後オリンピックについて知っていることを発表していき、それを黒板に整理していった。

主な内容としては、「4年に一度開催される」、「夏季と冬季の大会がある」、「いろいろな国が参加する」、「陸上競技などをしている」、「選手だけでなくいろいろな人が来る」、「人手がいる」、「コストが高い」、「56年ぶりに東京で開かれる」など、様々なことが出され、多様な視点からオリンピックを見ていることがうかがえた。



(2) 展開

続けて、開催国の一覧を示した地図と開催国の一覧表の年表を見ながら、夏季オリンピックを開催するために必要なことについて考えていった。「たくさんの国の参加」「たくさんの人、選手や観客の参加」「道路、道案内、トイレなど、開催地の整備」、「空港、鉄道などの交通手段」、「ホテル」、「たくさんの競技をするのでたくさんの施設」、「たくさんのお金」、「メディア、放送、Wi-Fi」、「世界の協力」、「被災地の復興」、「国旗」など、このことについても多様な視点から様々な意見が出された。

ここで、配付した開催国の一覧を示した地図と開催国の一覧表の年表に注目させ、「オリンピックを開催することができる国はどのような国でしょうか。」と発問した。児童からは、「治安がよい国」、「安心や信頼をされる国」、「平和な国」、「国と国とのつながりがある国」、「お金がある国」、「技術がある国」という意見が出てきた。これらは戦争が終わってから、日本が目指してきた国の姿であり、そのことを世界の国々が認めたのである。そのことを児童はオリンピックの開催という事実によって気づいたのである。

(3) まとめ

そして、最終聖火ランナーの坂井義則さんに注目させていった。スクリーンに次のシートを提示し、坂井義則さんが最終聖火ランナーに選ばれた理由について考えていった。

東京オリンピックの聖火ランナー

坂井さんが
聖火台の階段を
上っている写真

坂井さんが最終聖火ランナーに選ばれた理由は何でしょう？

- ① メダルが期待できる選手
- ② 生年月日
- ③ 戦後復興のシンボル

東京オリンピックの400mと1600mリレーで強化選手に指名されたが代表選考会で敗退

1945年（昭和20年）8月6日 生まれ

広島県生まれ

最終聖火ランナー 坂井義則（19歳）

多くの児童が理由については明らかではないまま、「③戦後復興のシンボル」を選択した。本時の学習の流れから最も妥当と判断できる選択肢であることから、児童たちは迷いなく選んでいる様子であった。また、数人ではあったが、「①のメダルが期待できる選手」を選んだ児童もいた。

この二つの選択肢は妥当と判断されるものであり、これらを選んだということは本時の学習についての理解が図れているということであると考える。

「②生年月日」を選んだ児童はいなかった。しかし、それぞれの選択肢についての説明をしていく中で、「昭和20年8月6日生まれ」と言うと、児童たちのなかにどよめきが生じた。この日付を聞いた瞬間に広島原爆投下を想起したためである。そして、「生まれたのは広島県。」と告げると、もうすべて理解したというように、互いに顔を見合わせ、うなずきあっていた。まさに原爆が投下されたその日に、広島で生まれた青年が、世界中の人々が見つめる中、平和の祭典オリンピックの開会式で聖火を掲げて走っているという事実のもつ意味に

気付いたのである。戦後の日本にとって1964東京オリンピックがどのような意味をもつものであったのかの理解が深まった瞬間であった。

本時の終末で行う予定だった「もし、あなたが1964年の東京オリンピックの開会式でアナウンサーだったら、どんなアナウンスをしますか。」という学習は授業の進度の都合で実施できなかった。そこで、宿題という形で児童に書いてきてもらうことにした。何点かを紹介する。



・A児 「今、階段を登っている坂井義則さんは、1945年8月6日広島で生まれました。8月6日は原爆が初めて落とされた日です。1945年に敵だった国の方々も、今はこのようにしてあの日に生まれた坂井義則さんの聖火ランナーを見てくださっています。この19年で日本が様々な国と平和を結び、オリンピックを開催できることが私にとって素晴らしいことだなと思います。」

・B児 「最終聖火ランナーの坂井義則さんが聖火台へ階段を駆け上がっています。坂井さんは1945年8月6日、広島で生まれました。1945年8月6日、広島のキーワードでわかった方もいると思いますが、そうです。坂井さんは広島に原爆が投下された、その日に生まれました。日本は戦争を長いこと続け、1945年にそんな戦争を続ける国から抜け出しました。そして戦争が終わってから19年の年月で、今、こうしてオリンピックを開催できました。坂井さんは今の日本、つまり、『平和な国、日本』の象徴です。」

・C児 「今、人類の経験したことのない、まるで地獄に突き落とされたあの日に生まれた坂井義則さんが、階段を駆け上がっています。たくさんの月日が流れた今、あの日からは考えられないような復興を遂げています。日本はこのままずっと平和が続くこと、戦争でぎせい者を出したくない、戦争や核兵器がこの世から消えることを、願いを込めて点灯します。」

どの児童も、坂井義則さんを平和の象徴として捉え、今、平和な国に生まれ変わった日本を、そして平和な国として生きていこうとしている日本の決意をメッセージに込めている。他の児童たちも平和をキーワードにアナウンス文を書いていた。そして、豊かさや世界の国々との友好など、それぞれの児童がこだわったところをアナウンスに取り入れていた。児童が書いたアナウンス文からは、終戦後の新しい日本の歩みを自分なりの見方・考え方を働かせて考えていることが見て取れる。

VI. まとめ

「1964東京オリンピック」は学習指導要領にも示されている取り上げるべき事象である。教科書にも掲載されている。つまり、教師が授業を行う際には必ず取り上げる教材である。しかし、教科書に記載されているままを児童に理解させる学習を進めるならば、「1964東京オリンピック」は児童の関心を高め、考えを深める教材とはなりえないかもしれない。先に紹介したように、児童が見方・考え方を働かせて考えを深める学習となりえたのは、「1964東京オリンピック」について教材研究を行い、事象の意味を捉え、児童に身に付けさせたい概念的な知識を明らかにしたり、児童の知的好奇心をくすぐるために、どのような出会い方をさせればよいのかを構想したり、児童の実態をもとに、どのように学習を進めることが効果的なのかなどを構想したりしたからである。

本稿の「Ⅲ. 有田和正の「ネタ」について」でも示した、「立派な目標を考える前に、どんなネタで勝負するのか考えることにしよう。そして、おもしろいネタを見つけよう。ネタがみつかったら、目標をもっともらしく考えればよい。いや、考えなくても、ネタがきまれば目標もきまる。そして、ここまで考えれば、授業の流れや必要な

資料などもおのずと決まってくる」という教材についての考えのとおりである。

今回の取組から、児童の主体的な学習を成立させ、考えを深める学習を行ううえで、教材、そして教材研究の重要性は、明らかになったと考える。そして、教材研究とは、教材そのものの理解ではなく、児童の実態を踏まえ、児童に何を理解させたいか、何について考えさせたいか、どのような学習を経験させたいかといった児童の確かな理解を実現させたいという教師の願いが具体化しなければならないということも見てきたように思う。

最後になったが、今回の取組を進めるにあたり、快く協力をいただいた王寺町立王寺南小学校の校長先生はじめ諸先生、とりわけ学期末の忙しい時期にもかかわらず学級を提供いただき、授業を進めるうえで多くの協力をいただいた松岡佑香先生に感謝を申し上げる。

引用・参考文献 (References)

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』日本文教出版（2017）
- 2) 有田一正『授業のネタ 社会2 中学年』日本書籍（1988）
- 3) 有田一正『名人への道 社会科教師』日本書籍（1989）
- 4) 文部科学省『小学校学習指導要領』（平成29年告示）（2017）

文部科学省『小学校教材整備指針』

天野正輝（1999）『教育課程重要用語300の基礎知識』明治図書

長岡文雄『有田和正氏の論文を読んで考える』（「授業研究」所収）明治図書（1985）

山本康雄「東京オリンピック」（みずほりサーチOctober 2013）（2013）